

## 家庭科教職課程履修生の家族・保育内容の 指導に対する課題

室 雅 子\*

Problem of the students in home economics teacher training course  
about teaching of families/child care.

Masako MURO

### はじめに

家族・保育内容において、必要な科目を履修し終えた教職課程の4年生はどの内容も学ぶ意義がわかり、内容の詳細も説明できるべきではあるが、現職教員でもそれは難しい。

家庭科教員の家族教育体験の調査分析を行った片田江(2010)は、家族領域を教える家庭科教員には「とりあえずお知らせみたいな感じで教える」「私だって私の人生しか知らないからと思いながら教える」「気を遣いすぎて、ちょっと怖いと思いながら教える」の3エッセンスがあることを指摘し、これらの困難に対し、家族領域の学習目的や意義、指導方法、最新の動向についての研修機会を教員に提供する必要性について述べている。この「とりあえずお知らせ」は、「教員が学習内容に意義を見いだせなかったり、指導方法がわからなかったり、学習内容に対する自らの知識に自信を持てなかったり学習内容のアップデートに苦労したりして当たり障りなく授業を終えてしまう」というものであると述べている。これは教職課程の大学生にも起こりうる状況である。「私だって私の人生しか知らないからと思いながら教える」ということに関しては、「教員としての自分とそうでない自分との間にあるギャップに直面することがある」時に「対処法がわからず戸惑ってしまう気持ち」であるとしている。片田江の挙げた事例の中にも個人的価値観と教えたい事項とのギャップや、体験のない子育てに関する事項で困る事例があるが、大学生はほぼ創設家族を営む経験や子育て経験のある者はおらず、未知の現象を教えたり、自己の家庭とは異なることを教えるギャップにはまる可能性がある。

三住(2012)は、高校家庭科教員の家族学習の指導上の困難点として「生徒の生活環境にばらつきがある」「プライバシーにふれる」などを挙げたほか、家族領域の学習目標についての質問に対し、無回答が3割もあり、目標を持たずに学習内容を設定していることを疑問視している。この題材目標の設定を欠いていることの指摘は、村田ら(2017)も実践論

---

\* 教育学部 子ども発達学科

文の分析から述べている。これらの問題は、未経験事項の多い教職課程生も同様と考えられる。三住は、「生徒の家庭環境にばらつきがある」「プライバシーにふれる」ことが指導上の困難であることから、指導方法の研究が強く求められることを述べているが、この繊細なテーマを扱っていることへの自覚は、家庭科教員にとって大切な要素であるとも考えられる。

村田ら(2017)は前述の指摘の他に、「現代の社会問題などに着目し、社会的な背景は概観することはできているものの、学校や地域の課題に落とし込む段階、生徒の実態へと落とし込む段階で記述が抜け落ちており、文章の展開の根拠が不明確な箇所が見られた。そのため具体的な問題の把握に至っていないという課題が示唆された」と指摘しており、現職の教員においても授業で扱っている課題を生徒自らの問題として考えられるまでの展開が行われていないことや表面的な知識伝達や思考にとどまっている可能性がある。

それでは、教員を育て送り出す側としての大学では、具体的にどのような内容についてどのような力をつければ良いのであろうか。本研究では、どのような指導内容が学習意義や学習内容を理解できていないのか、またどのような不安を抱いているのかを具体的に示し、今後の家庭科教員養成における課題を見出すことを目的とした。

## 方法

愛知県内の中・高家庭科免許取得希望の教育実習体験済みである大学4年生24名に、高等学校の教科書を参考資料として用いた無記名自記式の質問紙調査を実施した。実施時期は2018年11月である。(回収率83%)

質問項目として、高等学校家庭総合教科書(T社)に掲載の家族・保育・高齢期・福祉内容の見出しを用いて(44項目)、教科書の該当範囲をみながら、

- A 学ぶ意義がわかり、正答の理由(教える内容の詳細)も説明できる
- B 学ぶ意義はわかるが正答の理由(又は教える内容の詳細)までは説明できる自信がない
- C 内容は理解できるが、何を教えるところなのかわからない
- D 教科書の記述でわからないところがある

の4段階で本人の理解程度と具体的な不安内容を記述してもらった。

## 結果

### 1. 調査対象者

対象学生は、家政系学部食物系学科10名、被服・住居系学科10名で同数であった。

質問項目(教科書の内容項目)に対し、所属学科との関連を見たところ、フィッシャーの正確確率検定により有意な差はどの項目にも見られなかったことから、本調査での家族・保育内容に対する、学科の専門性による影響はないと考えられた。このことを前提として、対象者の回答は中高家庭科の免許取得希望者として学科を区別せず分析を行った。

## 2. 学ぶ（教える）意義理解と指導内容への自信（全体）

「A 学ぶ意義がわかり、正答の理由も説明できる。」という回答に丸を付けた回答者はその内容が理解できている、教える自信もあると自認していると考えられる。表1は、全44項目の回答を、A回答（学ぶ意義がわかり・正当の理由も説明できる）を基準に降順にしたものである。また、家族・保育の内容は、大きく分けると家族・高齢者・保育の3つに分けられることから、表中では家族に関わる事項や法律・制度等の内容を●印、高齢者や高齢期の特徴や制度等の内容を◆印、乳幼児の特徴や子育てに関わる法律・制度等に関する内容は★印で示した。

結果は、全員が「学ぶ意義も理解も説明もできる」とした項目はひとつもない一方で、一人も理解できていないという項目もなかった。（表1）

家族・保育・高齢者の内容についての指導の自信度合いは、分野による極端な偏りもみられず、内容が実際に見たことがある事象や想像しやすい内容の知識は高く、法律・制度に関する内容や、対象者自身が未体験の事項は低いという傾向が見られた。

## 3. 学ぶ意義はわかるが自信がない項目とその理由（B回答）

Bの回答は「学ぶ意義はわかるが正答の理由（又は教える内容の詳細）までは説明できる自信がない」というレベルである。これに該当すると回答された項目を多い順（降順）に並べ、理由の記述内容から、「本人の体験不足・想像できない」「本人の内容理解不足・内容が難しい」「指導目標や方針がつかめていない」「生徒に関する課題」に分類したものが表2である。

社会保障、税金、高齢社会、親として、など対象者自身が未体験である内容が多く挙げられ、上位に位置された項目の内容は、実際に直面したことがないために具体的なイメージがなく、授業で説明するとなると理解不足や難しさを感じ、説明できるレベルに達していないという自覚をもっていることが明らかとなった。

また、未体験であることから、教員となる自分自身が授業内容自体を想像できない、自分のことなどによる実例を授業で話せないという不安に繋がっていた。

知識としても、様々な法律や制度、保険の仕組みなどが「難しく理解ができていない・追いつかない」と挙げられた。

全体としては、「本人の体験不足や内容の理解不足」に分類される理由が多く挙げられ、「指導目標や方針がつかめない」「生徒に関する課題」に分類される理由は少なかった。これに関しては、前述の三住の現職の高等学校家庭科教員に対して行った調査では、家族領域について「指導上の困難がある」と挙げた理由には「生徒の家庭環境にばらつきがある（54名・64.3%）」、「プライバシーにふれる（32名・38.1%）」、「実習に比べ生徒の学習意欲が低い（18名・21.1%）」などが挙げられていたが、今回の調査は実際の現場には教育実習の短期間しかでていない大学4年生であるため、まだ現場で直面する課題には気づけていないことが推測される。生徒に興味をもたせたり、想像させる難しさを述べたりした者はいたが、背景となる家庭環境や学習意欲に関する教え方の難しさにまで言及した指摘は少なかった。

表1 各内容項目の自信の程度（A回答を基準に降順）

(%)

内容項目	自信の 程度	A学ぶ意義理解 可能・正答理由 の説明可能	B意義理解可 能・正答理由の 説明に自信ない	C内容は理解可 能・何を教えると ころかわからない	D教科書の記述 でわからないと ころがある	無回答
●一人で暮らす		90		10		
◆老化と成熟		90	10			
◆人生85年代を生きる		85	10		5	
★子どもの育つ力		85	10	5		
◆高齢者の自立を考える		85	5	5	5	
◆共生社会を目指して		85	10	5		
◆ボランティア活動		85	10	5		
●人は生涯を通して発達する		80	15	5		
◆人の一生と高齢者		80	20			
◆多様な高齢者		80	10		10	
●家庭生活と地域福祉		80	15	5		
●自立について考える		75	25			
★生まれつき持っている能力		75	20	5		
★身体の発達		75	15	5	5	
◆高齢社会の現状と課題		75	15	5		5
●家族・家庭をどう捉えるか		70	25		5	
★心の発達		70	20	5	5	
★遊びの発達		70	20	5	5	
◆高齢社会の将来像		70	15		15	
●リスクに備える		70	15	10	5	
●目標を持って生きる		65	30	5		
●多様なライフスタイルを考える		65	30			5
●社会の中の家族・家庭		65	30		5	
●男女で担う家庭生活		65	30		5	
★子どもの生活と保育		65	30	5		
●福祉の捉えの変化		65	25	5	5	
★子どもの誕生		60	35	5		
★子どもの権利と福祉		60	30		10	
◆日常生活の介助の仕方		60	30	5	5	
●パートナーと生きる		55	45			
★子どもと暮らす・親を支える		55	35	10		
◆家庭生活と地域・福祉		55	25	20		
★人間の愛と性		55	25	20		
★子どもの発達と保育		55	30	15		
★幼い子どもとのふれあい		50	45	5		
★現代の子育て環境		50	45		5	
●地域社会の関わり		45	45		10	
●家族と法律		40	40	5	15	
◆高齢期の生活課題		40	50	5	5	
◆税金や社会保険料を払う義務		35	55		10	
●自分について考える		30	60	5	5	
★親として育つ		25	60	5	10	
◆高齢社会を支える仕組み		25	55	5	15	
◆社会保障とは		25	65		10	

記号は内容を示す = ●家族★高齢期★保育

家庭科教職課程履修生の家族・保育内容の指導に対する課題

表2 学ぶ意義はわかるが自信がない理由（B回答）（B全体で降順）

内容	選択割合	B：意義は理解できるが正答の理由の説明に自信がない（降順）			
		本人の体験不足、想像できない	本人の内容理解不足・内容が難しい	指導目標や方針がつかめていない	生徒に関する課題
◆社会保障とは	65.0	まだ自分あまり体験していないので不安	保険の種類や社会保障の仕組み・法律（が難しい・説明できない、理解できていない・うまく説明できるか不安・勉強不足）		
★親として育つ	60.0	具体例が出せない・推測しかできない（親になったことがない、障害のある子が周囲にいない）、関わりが難しそう（障害のある子）	知識不足で説明できない（法律）、	教える自信がない	生徒に興味を持たせるのが難しい・教え方が難しい（法律）
◆高齢社会を支える仕組み	55.0	介護施設等を使用しないからわからない	内容が難しく説明できない（保険制度・保険サービス・法律・制度・年金の仕組み・介護保険等）	介護の方法に不安、深く教えると深くなりすぎる	
◆税金や社会保険料を払う義務	55.0	自分が体験したことがないので説明しにくい	（税金・社会保険料を）払う意味を伝えられない・説明できない、社会保障制度が難しい・説明できない、法律を説明できない		
◆高齢期の生活課題	50.0	周りが高齢者が元気だからよくわからない	「公的年金制度」を説明できない、日常生活の自立の課題が説明できない、どんな支援があるのかわからない		生徒にとって想像しにくい箇所であるため難しい
●パートナーと生きる	45.0	結婚生活が未経験のためわからない・エピソードがないので説明しづらい、自分のことも話しにくい	具体的にどのように深めるのかわからない、社会背景を加えながらうまく説明できない、		想像させるのが難しい、DV防止法などの法律が説明できない
★幼い子どもとのふれあい	45.0	実際に子育てをしたことがないので話づらい、いろいろな子どもとふれあったことが無いから例を出して説明できない、子どもと接する機会が少なく自信が無い、自分なりのやり方や行動でしか説明ができない	子どもとふれあうときのポイントが不安、詳しいことを知らない（どう行動すべきかなど）	何を伝えるのかわからない、子どもとふれあう場を設けられたとしてもできないと思う	
★現代の子育て環境	45.0		新しい法律に追いつけない、母性神話、三歳児神話の説明ができない		多様化しており様々な生徒がいる中で説明するのが難しそう
◆地域社会の関わり	45.0	例が出せない	新しい法律に追いつけない、ファミリーサポートや施策（エンゼルプランなど）に詳しくない・よくわからない・説明できない、どんな支援があるのかわからない、勉強不足、子どもを預ける施設やその違いがわからない		
●家族と法律	40.0		特に民法や旧法を説明できない、相続について説明できない、法律が難しい、法定相続が自信が無い、法律の細かな説明は自信が無い、勉強不足のため、言葉などは理解できるが、説明するほど仕組みをわかっていない	どこに重点を置くかわからない	
●子どもと暮らす・親を支える	35.0	子育てや親と同居や介護の経験が無いので具体的な説明がわからない、自分のことも話しにくい、	社会背景を加えながらうまく説明できない	具体的にどのように深めるのかわからない	想像させるのが難しい
★子どもの誕生	35.0	自分も子どもがいない、イメージがあまりできない	胎児の発育と母体の変化について説明できない、「生命の創造」が不安、		
●多様なライフスタイルを考える	30.0	自分は平凡だから理解できない生き方もあるから説明できない	DINKS、DEWKSが説明があやふや、事実婚が難しい、重要語句について注書き程度のことしかわからない、太字の意味はわかる		
●社会の中の家族・家庭	30.0	外部化の例が浮かばない	色々な施設などもあるからそれも家族になるのかわからない、詳しく説明できない、勉強不足のため	どこに重点を置くかわからない、家庭の機能のポイントがわからない	

表2 つづき

B：意義は理解できるが正答の理由の説明に自信がない（降順）					
内容	選択割合	本人の体験不足、想像できない	本人の内容理解不足・内容が難しい	指導目標や方針がつかめていない	生徒に関する課題
●男女で担う家庭生活	30.0	男女差別のある背景などを説明できない、時代に合わせた説明が難しい	法律の詳しい説明できない、太字の大体の意味はわかるが詳細はわからない、勉強不足のため	どこに重点を置くか不明、家庭の機能のポイントがわからない、今は共働き、専業主婦等同じぐらいにいると思うからどっちも正しいし、分業だけがいいみたいな説明になっている風潮が疑問に思う	
★子どもの発達と保育	30.0		発達の目安は表を見ないとわからない、親子関係の発達が説明できない、何歳で何ができるのか理解できていない、「基本的生活習慣の発達の目安」の順番が不安、発達段階の流れはわかるが、個人差があることなど詳しく説明できない		
★子どもの生活と保育	30.0	育てたことがないため、離乳の進め方の目安について理解できない、実際の子どもイメージができないからしっかり説明できない	子どもの食事・子どもの健康が不安、「予防接種」の内容が詳細がわからない、「子どもの健康」が説明できない、	よい（指導の）デザインが思いつかない	
★子どもの権利と福祉	30.0	虐待やされていた友人もいないので身近でないイメージできない	新しい法律に追いつけない・難しい・覚えていない、各国との比較ができない、他国の子どもの生活について詳しく知らない、子どもの権利が守られていない国の状態をよく知らない		
◆日常生活の介助の仕方	30.0	介助方法を文章でしか知らない、介助をしたことがないからわからないためただの説明程度しかできない、実践できない、	介助の仕方の説明ができない	授業目標・レベル・展開が見えていない	イメージがしにくいと思うため説明が難しい
●家族・家庭をどう捉えるか	25.0	家族の多様化により自分でも何が家族かよくわからないから	「家族」と「家庭」の違いをうまく説明できない、勉強不足のため、家族というざっくりとした言葉をうまく説明できるか不安		家族の概念が人によってそれぞれだと思うので教えずらい
●家庭生活と地域・福祉	25.0		問題点等を説明できる自信が無、勉強不足のため	福祉が幅広いのでどれを詳しく教えるか不明、どこに重点を置くか不明	近所付き合い等今はある方が珍しいと思うから説明しにくい
★人間の愛と性	25.0		命に対する責任のところがうまく説明できない	どう教えようか迷う、保健みたいになってしまいそう、家庭科らしさを出すのが難しいそう	
◆福祉の捉えの変化	25.0		全体的に知識不足を感じる、詳しく説明できる自信がない、ポジティブウェルフェアが説明できない	具体的に何を伝えるのかわからない	福祉を身近に感じない生徒にどう伝えるかが不安
★生まれつき持っている能力	20.0	身の回りで子どもの誕生を体験していないからどう教えたらいいかわからない、知らないため	体重減少や黄疸になる理由をうまく説明できない、「生理的体重減少」がなぜ起こるのか説明できない		
★心の発達	20.0	乳幼児期の子どもにどうやって接すればいいかわからない、身の回りで子どもの誕生を体験していないからどう教えたらいいかわからない、知らないため、	何歳でどのような遊びをするというのを詳しく理解していない		
★遊びの発達	20.0	身の回りで子どもの誕生を体験していないからどう教えたらいいかわからない、言葉はわかるが、実際のイメージができないから	遊びの違いを説明できる自信が無い、「乳幼児期の発達の目安」の順番が不安、勉強不足		
◆人の一生と高齢者	20.0	ライフコースとか自分も想像できない	社会背景を加えながらうまく説明できない、高齢者の定義は説明できる	どう伝えるのか何を伝えるのか不明	
★身体発達	15.0	身の回りで子どもの誕生を体験していないからどう教えたらいいかわからない、言葉はわかるが、実際のイメージができないから、知らないため	個人差が説明しづらい		



## 家庭科教職課程履修生の家族・保育内容の指導に対する課題

表2 つづき

内容	選択割合	B：意義は理解できるが正答の理由の説明に自信がない（降順）			
		本人の体験不足、想像できない	本人の内容理解不足・内容が難しい	指導目標や方針がつかめていない	生徒に関する課題
◆高齢社会の現状と課題	15.0	私たちがどう行動していくべきかわからない	グラフの説明ができない	社会の授業になってしまいそう	
◆高齢社会の将来像	15.0	自分も将来わからないのに想像できない	法律・バリアフリーのところをうまく説明できない、様々な制度・法律がわからない		
◆リスクに備える	15.0		自助共助公助の違いの教え方、詳しく説明できる自信がない	具体的に何を伝えるのかわからない	
◆家庭生活と地域福祉	15.0	地域福祉を利用しないからわからない	福祉に自信がない、地域福祉について具体的には説明できない		
●人生85年代を生きる	10.0		合計特殊出生率についてグラフの年に何が起ったか詳しく説明できない	人生という言葉が重いから難しい	
★子どもの育つ力	10.0	身の回りで子どもの誕生を体験していないからどう教えたらいいかわからない、イメージがあまりできないから知識だけを伝える授業になりそう			
◆老化と成熟	10.0	身近に高齢者がいないからイメージできない	認知症についての正しい知識が不安		
◆多様な高齢者	10.0	周りの高齢者がみんな同じ感じだから説明できない	個人差のところを説明できない	どう伝えようか自信がない	
◆共生社会を目指して	10.0	どんな問題があるのかわからない	共生社会という言葉がよくわからない		
◆ボランティア活動	10.0	ボランティア活動をあまりしないからわからない			
◆高齢者の自立を考える	5.0	介助法は文章でしか知らない	介護について自信がない、コミュニケーションの重要性の具体的な方法を勉強できていない		

### 4.（内容は理解できるが）学ぶ意義がわからない項目とその理由（C回答）

C回答（学ぶ意義がわからない）の割合は、表1を参照されたい。C回答の内容では、5%が1人、10%が2人、15%が3人、20%が4人の回答である。最も指摘されたのは、「家庭生活と地域・福祉」「人間の愛と性」で、続いて「子どもの発達と保育」であった。この他にも挙げられた項目に共通して、自分になじみのない内容に対して想像しづらいことから、学ぶ意義が見いだせないでいることがうかがえる。

まず、「教えるポイントがわからない」と、教える意義が理解できていないと思われる理由が記述された具体的な内容は、「一人暮らしによる自立」「子どもを育てる意味」「家庭生活を支える地域や福祉的支援との関わり」「子どもの生活習慣形成」「老化に応じた生活の工夫や支援に対する心構え」といったものであった。

また、「何が重要か・どこを重視するかわからない」といった、教科書に太字の語句がなく重視するところがわからないというような記述が書かれた内容は、「子どもを育てる意味」「親子の支え合い」「家庭生活と地域・福祉的支援との関わり」「子どもとの関わり方（コミュニケーションや愛着形成）」であった。太字が無いと重要なところがわからないということは、内容の本質を理解しておらず、「ここが重要だ」と自己判断ができないということである。

「教え方がわからない・文章だけでは伝えにくい」といった指導方法がわからないという記述があった内容は、「家族に関する法律（民法等）」「幼い子どもとの触れ合い」「子育て

ての現状」「年金、高齢者の日常生活の介助の仕方」「介護保険」「介護サービス」「生活保護」等である。これらの項目は、学ぶ意義はわかるが教えにくいとしてあげられた項目でもあり、難しさだけではなく、これを教える意義も伝わっていない学生がいることがわかる。

また、「家庭科で扱う必要があるのか疑問」といった、家庭科と他教科との関わりにおいて、家庭科で扱う必要性や、他教科との違いをどうしたらよいのか迷う記述が見られたのは、「共生」「地域福祉」「ボランティア活動」の内容であった。

総じて、C回答からも自分になじみのない内容に対して想像しづらいことを理由に、学ぶ意義が見いだせないでいることがうかがわれたが、太字がないと重要なところがわからないという状態は、対象者らが、「太字が重要語句」と教えられてきたことが推察される。太字は重要ではあるが、教科書の記述や資料には、太字になっていないが重要な要素は掲載されている。そこは家庭科教員が教材研究の上で自らが説明をし、太字以外でも大切な事項は押さえていくべきであるが、太字を中心に記憶し再生するだけの授業を受けてきた可能性が推測される。各単元や本時に扱う内容全体を見渡し、太字に頼ることなく重要な事項をつかめるような力の育成が必要である。

## 5. 教科書の記述がわからないという具体的な内容（D回答）

教科書の記述がわからない内容としては、次の内容が挙げられた。

- ・家族…創設家族、家族に関する法律的内容（民法）、性別役割分業、ファミリーフレンドリー企業
- ・保育…子どもの発達、母性神話、3歳児神話、集団保育の各園の違い、子どもの権利条約、子どもに関する法律、
- ・高齢期・福祉…エイジズム、高齢者とのコミュニケーション、年金の仕組み、生活保護の仕組み、介護の心構え、介護サービスの種類、介助方法、老人福祉法、バリアフリー新法、自助公助共助

これらの内容は、実際には免許取得の必修の教科専門科目として授業で詳しく扱った内容も含まれている。実際に教科専門科目で扱い切れていない内容は、家庭科での指導を想定してより詳しく扱っていくべきであるが、扱っているにもかかわらずわからないとしてあげられた項目は、いずれ自分が家庭科教員として教えなければならないという意識を持たせるような指導を大学で行わなければならないことを示唆している。

## 6. 学生の体験と内容への理解・自信との関連

内容調査と同時に、自己体験として、中学～現在までに「一人暮らし経験」「乳幼児／高齢者との世話」「幼児／高齢者相手のボランティア」「中／高での保育実習」「家庭内での家庭的な会話」の有無や、「各分野の好き嫌い」等を尋ねて、クロス集計をした。

今回、ベビーシッター経験や家族／保育系学科、乳幼児と一緒に住んでいる、という学生はいなかったが、5%水準以上で有意な関連が見られたものは以下のようであった。

- ・中学で保育実習に行った者は、新生児期の特徴には自信があり（ $p=.035$ ）、現代の子育て環境を教えるのに自信がない（ $p=.019$ ）という関連が見られた。
- ・高齢者相手のボランティアやアルバイトをしている者は、「高齢社会の現状と課題」が



全員A回答である ( $p=.041$ )という関連が見られた。

過去の保育実習や高齢者との日常的に接する機会が、授業実施への理解や自信につながっていることがわかる。中高の実習体験は実施がまばらであり、教員養成課程の元で実習を効果的に行うことで体験不足の補完や想像力の育成をする必要があると考えられる。

## まとめ

内容の理解不足による「詳しい説明ができない」といった回答から想像される、教科書の文言伝達しかできない「とりあえずお知らせ」な上澄みだけの授業になる懸念や、体験不足による不安はすでに現場に出る前の教職課程履修生の時点でも同様な傾向が見られた。

現職の教員対象の先行研究による、多様な価値観や家庭事情に関わる生徒への配慮や生徒の理解への不安は、教育実習体験済みとはいえ、4年生ではまだ指摘が少なかった。これは現場で日常的に生徒と接していないことによるとと思われる。しかし、本来の家庭科教員養成という意味で考えるのであれば、中高生の家庭環境が多様であり、プライバシーにふれることを、現場に立つ以前であっても、心構えとしてもっと意識できるようにしておくべきである。

知識面では、法律や制度の理解やその変化への対応に不安が多く表れ、経験不足は実例が授業で出せないだけでなく、それ以前の授業作り段階で授業内容への想像力に影響することが明らかとなった。家族学習の課題について綿引(2018)は、「拘束性の強い学習指導要領に書かれている学習の意義や目標、内容が、教師にとって自信を持って教えることができない内容であり、教えることへの不安を大きくしているのではないか」として、「家族を前提とする前に自己(個人)から出発し、価値の押しつけではなく自己の生き方やくらし方を模索する内容にする、社会的視野の中で家族の言説・自明性を問う、家族と社会の関係性を批判的に分析し、権利を行使し社会に参加する市民性を育む、生徒の思いや活動を活かしながらストーリー性のあるプロセスを重視した学びにする」などを対応策としてあげている。この「社会的視野の中で」という視点を大切にすることで、自己の実際の体験が無くとも教えることに自信が持てるようにはなるが、そもそも教える内容の理解や想像力(想像できるだけの実態の見聞)がないことには、批判的分析やストーリー性のある学びを作ることは難しいのではないと思われる。綿引が提案する効果的な家族学習の授業のために、不足している基礎的事項の補充が必須であると考えられる。

教員養成の指導においては、日々変化する家族や保育、高齢者に関する法制度の理解が個人では難しい様子から、これらをより一層詳細かつ丁寧に扱う必要性と、以後自己学習できる力の育成が必要であると考えられる。また、大学生での教職課程履修生だけでなく、大学を卒業して時間が経過したベテラン教員からも最新の法制度の説明は求められており、教員免許更新講習などで扱っていく必要がある。この法律の学習に対し、久保(2017)が、近年の法改正の動きを学ぶことは「法律を暗記するものではなく、変えられるものであるということを実感し、身近な人間関係に関わる法律をよりよくしていくことに主体的に関わる意識を醸成される」と述べているように、法律もただ教えてもらい、暗記して生徒に伝達するのではなく、法制度がどのような変遷を経て現在のように決められており、私たちの暮らしをよりよくすることになっているかどうか、どうしていったらよいかを批

判的に考えられるような学習が求められる。

生活体験の補充は個々の機会の訪れを期待してはいつまでも自信が持てない場合もある。また、経験しても「私だって私の人生しか知らないから」と思いながら教える」可能性もある。学習意義や指導方法を想像できる助けになるよう、大学での保育学の保育実習の充実や介護等体験での高齢者施設訪問を活用し、客観的に学習（指導）内容を体験できる機会を設けるべきであろう。この際、学生の中には子どもや高齢者と接することに抵抗がある学生もいる可能性がある。川嶋ら(2018)の調査に寄れば、212人中、17.5%は子どもと関わることに苦手意識があり、関わり方がわからない者も35.8%もいると報告されている。保育実習の効果については多くの研究がなされているが、このような子どもや他世代の人に接することが苦手な学生が何割か居ることを想定したプログラム作成が必要である。

### 引用文献

- 片田江綾子（2010）、家族について教えるということ、日本家庭科教育学会誌、53(1)、22-31
- 川嶋円香・刑部育子（2018）、子どもと関わることに対する抵抗感はどこからくるのか—大学生を対象にした質問紙調査から—、日本家政学会誌、68(12)、811-819.
- 久保桂子（2018）家庭科教育で扱う家族関係に関する法律、千葉大学教育学部研究紀要、66（1）、303-307
- 三住久美子（2012）高等学校家庭科教員からみた「家族」学習の現状と課題：「アンケート調査」をもとに、家庭科・家政教育研究、7、69-75
- 村田晋太郎・山本亜美・永田夏来（2017）実践論文に見る中学校家庭分野「家族」教育の現状と課題—全日本中学校技術・家庭科研究会機関誌「理論と実践」を対象として—、日本家庭科教育学会誌、60(1)、24-30
- 綿引伴子（2018）家族学習の課題、日本家庭科教育学会誌、61(1)、3-11